

砲爆撃と飢餓

福岡市西区 堤 亨

昭和18年11月20日午前3時20分（日本時間午前6時20分）「対空戦闘配置に付け」の下令ある。飛び起きて砲座に走る。半ズボンに鉄兜をもって、太陽は東の空に昇り始め、南方からかすかに爆音が聞え始めた。電波探知機は方位170度、高度8000と報じる。

戦闘指揮所から各砲台へ「射程内に敵機が入り次第単独発射せよ」と下令ある。爆音がある方向を見ると、水平線上に1000匹カラスが群れ飛んでいるように見える。弾薬庫から砲弾を取り出し砲に装填する。

照準器で敵機を追う。突如90度方向変針する。砲を旋回して機影を追う。4機編隊で、ダイヤ型に組んでいる。太陽を背にしたとたん左に旋回し45度で急降下を始めた。機体はギラギラと光っている。各砲台は一斉に発砲を始めた。米機は機関銃を発射しながら突込んでくる。

空中で地上からの砲弾と、米機からの銃弾が交差して実に壮絶である。米機は高度200m程度で爆弾を投下して、機首を引起し上昇する。

爆弾の爆発音はものすごく、爆発と同時に大地が揺らぎ砂塵が20mぐらい噴き上げ直径約6、7m、深さ3～4mの穴があく。我が方も応戦する。実に激闘である。

この間約15分で戦闘は終了する。米機は南方に退避し、静寂に戻り砂塵も消えたが、焼匂は未だ消えやらず残る。太陽は昇り暑さが増し汗が流れ落ちる。太陽の熱で鉄兜が焼けるのでなおさらだ。流れる汗が目に入り目が開かない。鉄兜を取り汗をふく。砲身は弾丸発射と太陽の熱のため焼けている。鉄兜で水を汲み砲身を冷却する。主要ヶ所に注油して砲の手入れを終わる。

朝食をする。乾パンと練乳である。砲座で休憩する。

午前4時米機は再度来襲し、前回と同じ態勢で爆撃を開始する。前回の教訓により鉄兜をかぶらず、タオルにて鉢巻で応戦する。タオルが汗を吸い込むため、視界がよい。本日は6回米機が来襲し延べ243機の空襲である。13時50分「対艦戦闘配置に付け」の下命ある。外海を望むと、水平線に米機動部隊は東から西に移動している。距離8000m、艦砲を発射している。戦艦、巡洋艦、駆逐艦、合わせて28隻が確認できる。我が方は15cm、14cm、12.7cm、8cm、カノン砲が一斉に発射された。双方の砲弾が空中で交差している。彼我の砲声は韻々と続く。

上空には観測機2機が旋回しながら弾着を確認している。ピーンピーンと飛翔してくる弾丸は案外遠くで弾着するが、シュルシュルと音がするのは至近弾である。戦闘開始後約1時間、突如米巡洋艦から、大火柱が上がり、黒煙がもうもうとたち始めた。我が軍の砲弾に被弾した艦は北方に退避した。

その後猛烈なるスクールが来て、視界が全くなくなった。約30分後スクールが通過し視界

が開けると、米艦は皆無で本日の戦闘がようやく終了した。戦闘中は無我夢中のため、全く恐怖感は無かった。爆撃と艦砲射撃により島は変貌し、椰子の幹の先端がもぎ取られまるで卒塔婆のようである。

以後1年8ヶ月の間毎日機種こそ違え、爆撃が繰り返され、タワラ、マキン、クエゼリン島と周囲は玉碎し、回路も遮断され、南海のまっただ中の小島に孤立した。

飢餓

内地からの輸送は、昭和18年12月23日、南海丸が入港し弾薬と食糧を搭載して入港したが、入港後30分で米機来襲し10分後に沈没した。

ミレー島には、陸、海軍人、軍属合わせて約5700人、弾薬と食糧と医薬品が不足していた。人間が生存するためには、衣、食、住が必要である。衣は暑い地域のため、禪だけでよく、住は雨露をしのぐ程度でよい。食は南海丸沈没により、内地からの輸送も絶無の状況で、備蓄の食糧を食していたが、減食による減食で、ついに11月皆無となった。この間、ねずみ、トカゲが何よりの馳走であるが、またたく間に食い尽くしてしまった。草や木の葉は、爆撃と艦砲射撃により皆無の状態であった。

19年6月から離島分散が許可され、施設隊(軍属)から開始され、陸軍と続いた。海軍は対艦砲、対空砲射撃のため最後になった。離島は小島ばかりであるが、爆撃がないため、椰子の実、パンの実があり、草も繁茂していたが、人間が多数のため、逐次不足。南瓜を生産していたが、ミレー本島は爆撃のため、あまり期待できなかった。離島も土地が荒廃して、あまり期待できなかった。

この時期に、アメバ赤痢、デング熱、パラチフスの伝染病が多発し、治療薬は皆無で、体力も衰弱しており犠牲者が多発した。食糧の補給が途絶して以来、体力も次第に衰弱してゆく。日毎に肉が落ち、手足の関節部分のみ大きくて、肋骨はあらわに見えるようになり、肩は怒り肩になり、頭髮も薄くなり、この奥に目があるという風貌になる。

テレビで見るアフリカの難民と同じである。この時期になると歩くにも足に力がなく膝ががくがくする。

食欲は旺盛であるが何しろ喰えるものがない。この時期が生命の限界であろうか、この時期を過ぎると突如として腹が膨らむ。こうなると歩くにも歩けず、食欲も減退する。栄養失調は急速に進行し、20才台の若い生命や肉体から、極めて短期的に70、80才の老衰の状態まで気力を奪い、肉体を蝕む。こういう状態になると、ローソクの火が燃えつき、炎が消えるように人間の生涯も終息するのである。

実に痛ましく残酷であるが、残る者も更に残酷である。食を求めて、何時まで続くか判らない、はてしなく食を求めて限りある生命と苦闘しなければならない。

戦死者の埋葬

昭和19年1月までの戦死者は、仏式により部隊葬として、その都度、厳粛かつ盛大に施行していたが、戦闘の激化にともない戦死者も増加した。隊員の中に僧侶がいたのでできた。昼間は爆撃のためできず、火葬も部隊葬も夜間に実施した。その後は火葬するにも燃料がなく、土葬になった。まず右手小指を小刀で丸く肉を切断し、指を手の甲の方向に押すと、ポキリと音がして指の間接部分から取れる。その指を缶詰の缶に入れ焼却して遺骨を取る。遺骨には階級、氏名、死亡年月日、本籍地を記入し安置した。

昭和19年5月12日イ184潜水艦が食糧40tを搭載して入港したとき、今まで戦死した戦友の遺骨全部を内地送還のため託送したが、イ184潜水艦は同年6月13日サイパン島沖で沈没した。遺骨も艦と運命を共にした。

死体を埋葬するにも穴を掘る体力がなく、爆弾の穴を利用した。爆弾の穴は深さ2、3mあるので穴の中途を平らにし、そこに遺体を安置し上から砂をかぶせて埋葬した。

昭和61年9月戦友の慰霊のためミレー島を訪問し滞在4日、戦友の埋葬場所を隈なく探したが発見できなかった。

戦後40数年経過し、島内は昔日のジャングル化し歩くにも困難であった。

御霊よ安らかなれと念じつつ帰路についた。

昭和18年12月14日	総員	5756名
昭和20年 9月28日	復員船乗船者	2602名
	戦死者	3154名